



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	死へと向かう旅の途上にて
Author(s)	山村, 高淑
Citation	世界思想, 35, 48-52
Issue Date	2008
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38243
Type	article
File Information	yamamura-5.pdf



死へと向かう旅の途上にて

山村高淑

父と過ごした時間

厳しい父だった。いつも怒ってばかりいた。典型的な頑固親父だったと思う。私が学校を休んだり、部活をサボったりすると、それこそ雷が落ちたことを覚えている。

しかし年に一度、父親の年休に合わせて数日の家族旅行に出かけるときだけは、「学校よりも、部活よりも、家族を優先しろ」と言われたものである。私が物心ついた頃から中学生くらいまでであろうか、この家族旅行は例外なく毎年実行され、しかも旅行代理店など通さず、父自らが予定を組んだり切符を手配したりしていたのだから、今から思えばすごい親父だったと思う。

国内旅行ばかりで、特に豪華な旅でもなかったが、毎年新し

い場所に旅することは子供の私にとって非常に刺激に満ちたイベントだった。こうして父と過ごした時間は本当に楽しかったことを記憶している。

そしてこれこそが、現在の私の旅好き、そして代理店を通さない個人旅行への執着の原点だと思う。そして何の因果か、今では旅を研究することが仕事になってしまった。意識することはほとんどないけれど、きっと今でも旅をしながら親父の背中を追いかけているのだと思う。

しかしそんな家族旅行も、三人兄妹の長男である私が高校生になってまずひとり抜け、次女が高校生になって抜け、そして一番下の妹が高校生になると開催されなくなってしまった。管理職になって忙しくなったこともあるかもしれない。父はすっかり旅をしなくなってしまった。父が急に弱くなったな、と思うようになったのはその頃からである。

父の死

父が旅をしなくなつて数年。そんな父が急逝した。私が二〇代半ばの頃である。

その日父は、体調が悪いといつて自ら職場に電話をして休みをとつた。そして昼ごろ、胸が苦しいので救急車を呼んでほしいと、唯一その場に居合わせた祖母に伝えた。祖母は救急車を呼んだが、しかし、救急車が到着する前に父は息絶えていたという。心筋梗塞であつた。

我々家族は悲しさを通り越して、どうしてよいやら途方に暮れた。昨日まで元気だった人間がこつも簡単に死ぬものなのか。特に実の子が目の前で死んでいくのを見た祖母の心中は如何ばかりだったろう……。

ところが、そうこうしているうちに、父の職場から次々と連絡が入つてきた。

まずは労働組合から。「お父様の死は過労死です。一緒に闘いましょう」と。彼らによると、地方の役所の課長補佐として勤務していた父は、自治体の中核市移行に伴い業務量が増え、かなり根を詰めて働いていたという。だから「あのような状況では死者が出て当たり前です」と。

続いて直属の上司たちから。我々が「過労死だったのですか」と聞くと、「決してそんなことはありません、仕事量も他

の職員と同等でした」と皆口を揃えて、歯切れの悪い回答をした。まあ、組合対策のマニユアルでもあるのだらう。

私も家族もほとほと疲れてしまった。一人の人間の死の前に、組合の連中も上司たちも、静かに手を合わせてほしかった。それがどうだ。悲しむ前に、線香をあげる前に、「戦おう」だの「私たちのせいではない」だの自分たちの話ばかり。特に上司たちののらりくらりとした態度には心から憤りを覚えたものである。

このとき私は思った。所詮、労働者の命はこの程度にしか思われていないのだな、と。働かせるだけ働かせて、あとは知らん顔なのだ、と。恥ずかしい話であるが、当時血気盛んだった私は、正直、この上司たちに、職場に、そして肩書きが下であるというだけで、若いというだけで過重労働を強いる年功序列の社会とやらに、とにかく復讐してやりたいと思つたものだ。母もそうだったと思う。結局、職場関係者は誰も信じられず、家族全員これ以上傷つくのが嫌になった。だから過労死認定の申請はやめた。

それからである。私は子供の頃から大好きだった旅の研究をすることを心に決めた。当時働いていた会社も辞めた。そして半年間無職の状態で勉強して、大学院に入り直した。思えばそれが当時の私にとつての、社会に対する精一杯の復讐だったのだと思う。仕事は人生の一部でしかないことを、仕事以外の時間、いや仕事以外の時間こそが大事であることを、世に訴え

ていきたかった。子供時代、父に「学校よりも、部活よりも、家族旅行を優先しろ」と言われたように。

「余暇」批判

こうして旅の研究——世間では観光研究と言われることが多いが——をはじめてはや一〇年近くが経つ。社会の趨勢も変化し、「家族との生活を楽しもう」とか、「趣味を楽しんで豊かな暮らしを」とかいったスローガンが、仕事人間に対するアンチテーゼとして普通に叫ばれるようになった。またまさに高度経済成長期を駆け抜けてきた団塊世代の大量退職を迎え、退職後、如何に仕事以外に生きがいを見つけるか、という課題が社会問題化しつつもある。

こうした事柄を観光研究では「余暇」に関する重要な研究テーマとして扱うことが多い。「仕事以外の時間」Ⅱ「余暇」、「退職後の時間」Ⅱ「余暇（人生という長い時間で見た場合、定年までの仕事時間とそれ以降の「余暇Ⅱ余生」）をどう有効に利用するか、ということだ。

しかしながら、どうもこの「余暇」という言葉が好きになれない。何故「余った」「暇」なのか。観光学辞典（一九九七年）によれば「余暇」とは「生活時間から睡眠・食事など生活するうえで必要な時間、仕事・学業・家事といった社会生活するうえで必要な時間、それに通勤・通学の時間を除いた時間」のこ

とであると記されている。このように定義されると、私のようなへそ曲がりには、仕事の時間は人間にとって尊い重要な時間であり、それ以外の時間は「余計」な時間であると言われているような気になって、なんだか腹が立つてくるのである。そして考えすぎかもしれないが、この「余暇」という言葉そのものが、人生において職場というコミュニケーションが一番重要、家庭は二次、個人の趣味に至っては生産性のない無駄なものである、という誤った認識を社会的に固定化する力を持っているように思えてならない。そう、まるで父を殺した「呪文」のように感じられてならないのだ。

いずれにせよ「余暇」という言葉を聞くと、私は、私の人生における時間の使い方と価値付けを、おせっかいにも何者かに強要されているような、何とも言えない居心地の悪さを覚える。経済的な生産性を有する時間こそが重要なのであって、それ以外は「余り」。資本主義市場においては労働生産性を高めることが至上命題。そのため国家や企業は労働時間以外の時間を無駄なものとして労働者を洗脳する必要がある。そんな見えざる手が「余暇」という言葉が使われる背景に作用しているような気がして、私は何だか気持ちが悪くなる。これはひょっとしたら、明治期の富国強兵策から戦前・戦中の一億総火玉的政策を経て、戦後の高度経済成長政策に至るまで、日本人の心理の深いところで通奏低音のように、そして強迫観念的に流れている呪文なのではないか。

ついでに言えば、言葉には言霊が宿る。言葉は人の思考形態を変容させ、固定化する。安易に言葉を用いることの恐ろしさを、我々言葉を用いて仕事をする人間は再考する必要があるのではないだろうか。

死へと向かう時間

なくなつてはじめてその重要性がわかるという。人間もそうである。亡き父と話しておけば良かったこと、一緒に行きたかったところ、いろいろとある。しかし今となつては叶わぬ夢である。悔やんでも悔やみきれない。

今でも父の急死は私の心に重く影を落とす。そして、父の死を思い出すたびに、私の命や、隣にいる人の命が、明日突然に終わりはしないか、という恐怖感に駆られてしまう。

「門松は冥土の旅の一里塚　めでたくもあり　めでたくもなし」という一休禅師の句を引くまでもなく、我々は例外なくいずれ死にゆく身であり、死へと向かう時間の流れの中にいる。この死へと向かう時間を直視すること、死を身近に感じること、は、実際恐ろしいことである。しかしそうすることで見えてきたものがある。

自分が手にしているいつ終わるかわからない時間というもの、自分自身のために使うべきものであること。そして愛する人のために使うべきものであること。決して会社のため、上司

のために使うものではないこと。人生において仕事で「主」でそれ以外が「従」であるはずがないということ。自らの時間と同様、相手の時間にも敬意を持って接する必要があること。感謝やお礼の気持ちは今直ぐに伝えるべきであること……。

社会の形態が変わり、核家族化も進み、死というものを身近に感じる機会は著しく減少した。そして無菌パックされた切り身の食べ物ばかりが増えて、生き物を殺して食べなければ人間は生きていけない、という当たり前のことを実感する場もすくなくなつてしまった。

ひょっとしたら最近では人や生き物が死ぬ瞬間を見たことのない人のほうが多いのではないだろうか。実はこの死を身近に感じられないところに、現代人の悲劇があるのだと思う。かけがえのない時間の使い方より、補充のできるお金の使い方を優先する。だからお金を稼ぐ時間は重要で、そうでない時間を「余暇」と呼んで従属的に扱う。巨額の金絡む取引は重要であり、日常生活のつまらない雑用は毛嫌いだ。そして仕事以外を「雑務」とか「余暇」と考える。だから、実は本来尊い自分自身のための時間を、真剣に生きるに値しない「余りもの」としてしてしまう。それはつまり、結局自分の人生を否定していることに他ならない。私たちはもつと仕事以外の時間を真剣に価値あるものとして生きなくてはいけないのだ。

……長々と筆を走らせてしまったが、そんなことを父の死は教えてくれた。死を以って教えるところのある父はすごいと思

う。

生前、父はいつも機嫌が悪く、怒鳴り散らしてばかりで、正直私は彼が嫌いで仕方なかった。しかしこうして彼の死を契機にいろいろと時間をかけて考えてみると、それは不器用な彼なりの愛情表現だったことに気付いた。そして、旅の仕方にして、時間の楽しみ方にして、彼に教えてもらったことがどれほど今の私に影響を与えているか、改めてよくわかった。ただただ、父に礼が言えなかったことが心残りである。そしてその呵責が今の私の研究に対するモチベーションでもある。

今後、旅の研究を続けていくことで、時間の使い方に関する多様な価値観が共存でき、人間が人間らしく生きていけるような社会になっていくことに、微力ながら貢献できればと思う。そして父のように過労死する方が少しでも減ってくれば良いと思う。

怖い父だったから、生前は父と語り合った記憶がほとんどない。しかし今、旅の仕事をしながら、常に父と対話しているような気がしてならない。父が見られなかったものを見てやろうと思うし、父が生きられなかった時間まで生きてやろうと思う。それが父を殺した社会に対する復讐だと思ふようになった。

そんなわけで、調査旅行をしながら、今でも家族旅行をしていたときの記憶がよみがえるのである。私の命の時間が燃え尽きるまで、父との旅は続くのだと思う。だからこそ、この命を

何よりも大切にしようと思う。

(やまむら たかよし)

北海道大学観光学高等研究センター 文化遺産観光論